

# 〈小学生部門〉



## 心の輪を広げる体験作文 最優秀賞

### 出合いにありがとう

益子町立益子小学校 六年 池田 衣音 いけだ いと

私は先日、二〇二〇年に行われた東京パラリンピックの開会式で君が代を歌ったシンガーソングライター佐藤ひらりさんの歌を聴く機会がありました。

ひらりさんは生まれつき目が全く見えない全盲という障害を抱えています。産まれた時から見えないのだから、見える世界で生きていく事がどれだけ大変なのか、私には想像しきれません。

何曲かひらりさんの曲を聴いた中に「七色の夢」という曲がありました。この歌の中にある七色という色もひらりさんはもちろん見たことがないのです。私たちが毎日見ている色のある世界がひらりさんには見えないのに、なぜひらりさんはひとつひとつ色を現すことができるのか、とても不思議でした。

お話を聞いていくとひらりさんは「私には七色が見えないけれど、きつと赤は情熱的な色。黄色は温かい色。なんだろうなと思いつながら色を感じて歌詞をかいている。」と話していました。その時に私は、色というものはひらりさんには見えないけれど、心の目で感じた気持ちから彩が生まれ、赤や黄色という名前が付いたのではないのかなと思いました。

私が最初にひらりさんの姿を見た時、その姿からイメージができ、

そこにひらりさんの歌声や演奏が彩になり、「シンガーソングライター佐藤ひらり」という姿が私の中ででき上がりました。ひらりさんのように何も見えない世界の中で、自分自身の感覚から感じる世界と、私たちが目で見て感じる世界は少し違うかもしれないけれど、見えないからこそその時その場所の雰囲気から感じるものがひらりさんの歌声から分かったような気がしました。

私は目で見てその雰囲気を感ずることができても、ひらりさんは見えないで雰囲気を感じます。でも共通して言えるのはどの雰囲気も自分の心の中の目を通して感じる事、その人が感じたままに表現することに意味があるのだと、私はひらりさんと出合いひらりさんの曲を聴き、気付かされました。私自身この時間がひらりさんの見えない世界に寄りそえた時間だったのではないのかと思いました。人はどうしても見えるものに左右され生きている所があるけれど、人は生まれた時からそれぞれ違ってはいるからこそ、その自分である姿を愛し認めていく、それがなによりの生きる姿ではないのかなと私は思います。

今回シンガーソングライター佐藤ひらりさんと出合い、『目が見えないことが悲しいことではない。見えない世界でも人との出合いに感謝することはたくさんあって、人に寄りそう事も出来る。人とのふれ合いで温かみを感じるからこそ生きる事への喜びとなり、自分というものを表現できているのだ。』と感じました。

「ありがとうの反対はあたりまえ」ひらりさんが書いた歌詞にある言葉のとおり、当たり前前の世の中であふれるより、ありがとうの

言葉であふれる世の中でありますように、私はこの出会いにありがとうを伝えたいです。

## 心の輪を広げる体験作文 優秀賞

### 大切なお友だち

小山市立小山第一小学校 三年 安藤 千紘  
あんどう ちひろ

わたしのまわりには、いろいろな人がいます。いっしょのクラスで、じゅぎょうをうける人もいますが、時々がうクラスに、いどうする人もいます。そのクラスは、少ない人数で、じゅぎょうをするそうです。クラスの友だちは、わたしと同じ三年生ですが、行動や、見え方、感じ方などは、一人ひとりちがいます。

みなさんは、なかよしの友だちはいますか。わたしは、元気な人といっしょだとたくさんさわげるし、おもいっきり自分をかくさずに遊べます。でも、ケンカをする時もあります。時間をまもれなかったり、じゅん番をまもれなかったり、ルールをまもれなかったりします。そんな時は、紙にやくそくや時間、順番などを書いて、みんなに分かりやすくします。わたしも、いいアイデアだと思っています。

しかし、イライラがばくはつして、楽しく遊んでいる時間が、ストップしてしまう時があります。そんな時は、少し時間がたつと落ちきます。わたしもイライラする時もあります。イライラすることは、だれでもすることだと思います。大切なのは、自分で上手に感じようを、整理することだと思います。

学校の友だちには、とても物知りな友だちがいます。きょう味の

あることを、たくさんしゃべってくれます。わたしが知らないこともあるので、聞いていてとても楽しいです。そして、おり紙や図画工作もとく意です。手先がき用なので、おり紙でお弁当やこん虫などこまかい所まで、作っています。発そうもゆたかで、わたしには、思いつかないことばかりで、とてもすごいと思います。絵も上手で見えていて、わくわくする作品ばかりです。こだわりが強く、とてもユニークなお友だちです。

友だちは、うまくいかず、思い通りにならないと、いらいらしたり、あばれたりする時もあります。そんな時は、落ち着くの待ちます。こまっていたら、声をかけて、じっくり話を聞いてあげます。

わたしは、クラスの人々には、こせいがあると思います。自分のやりたいことや、いやなことをしっかりと伝えるのは、とてもすごいと思いました。時々いやなことを言葉にして、あぶないこともあります。その時は、分かりやすくつたえていきたいと思っています。おたがいにストレスがたまらないように、すごせるかんきょうを作りたいです。

そして、一人ひとりのこせいをわかり合い、ささえ合える世界になることをねがいたいです。

## 心の輪を広げる体験作文 優秀賞

### わたしのおばあちゃん

小山市立小山第一小学校 三年 森<sup>もり</sup> 一華<sup>いちか</sup>

わたしのおばあちゃんは、重いにん知しようです。しょうじょうは、すぐ忘れてしまい、ごはんやトイレ、お風呂などは、かいごがひつようで、一人ですることはできません。いつも家族やデイサービスの人たちの助けがひつようです。

元気なころのおばあちゃんは、小さなことでもほめてくれたり、働くお母さんのかわりに、いっしょに楽しく遊んだり、お話をしたり、とてもおりよう理が上手で、明るくて、やさしくて、とても大好きでした。そんなおばあちゃんが、びょう気にかかった時、わたしは、「なんでびょう気にかからなくちゃいけないのだろう。」とショックで悲しかったです。さいしょのころは、元気で、はきはきとしていました。少しづつしょうじょうが進んで、今はわたしが話しかけても、かえしてくれません。とてもさみしくなります。

だけど、そんなびょう気がすんでいるおばあちゃんですが、時どき、お母さんにおこられてないっていると、おばあちゃんが「だじょうぶ。」などはげましてくれまます。また、わたしが手遊びをする時、おばあちゃんは、とてもわらってくれまます。昔のおばあちゃんもどつてきたみたいで、とてもうれしくなります。

今のおばあちゃんは、しょうじょうがしんこうしていてしせつに

入らなければいけないぐらいです。いっしょにくらしていると、大へんだし、少しこまつてしまひまます。昔のようにはいかなひけれど、おばあちゃんとなるべくいっしょにいたひです。しょう害があつても大ぜいの人に力をかりて、わたしの「おばあちゃんといっしょにいる。」というゆめをかなえてもらつてゐるんだなと思ひまます。

これからも、しょうがいがあつてもこれまで通り、仲よく、元氣に長生きしてほしひとわたしは、ねがひまます。

## 心の輪を広げる体験作文 佳作

### おばあちゃんとの思い出

小山市立小山第一小学校 三年 鈴木 すずき すみれ

わたしのおばあちゃんは、わたしが小学校に入る前に亡くなってしまいました。おばあちゃんは、じやく年せいアルツハイマーがたにんちしようというびょうきで、生活する中で大へんなことがたくさんあったそうです。わたしは小さかったので、びょうきのことはくわしくわかりませんが、一人でごはんが食べられなかったり、車イスにのっていたり、うまく話ができなかったりして大へんそうだったことはおぼえています。

おばあちゃんとの思い出は、テーマパークに行ったことや、歌をいっしょに歌ったことです。おばあちゃんは音楽がすきで、音楽がきこえてくると体をゆらしていました。話すことはできないけれど、おたがいに楽しい気持ちになりました。だんだんびょうきがひどくなつて、ずっとねているだけになつても、わたしたちが歌を歌つて、手遊びをしてあげると、目を開けたりモゾモゾ動いたりしました。

このようなけいけんから、びょうきやしうがいがあつても、自分のすきなことはやってみたいという気持ちになるのだなと思ひました。昔の動画を見かえてみたら、お話のときの声と歌っているときの声では、歌っているときの声の方が生き生きしていました。わたしはトイレや食事のお世話はできなかつたけれど、おばあちゃん

んのすきなことをいっしょに楽しめたので、それが一番よかつたのではないのかと思います。

わたしは今、ピアノを習っています。おばあちゃんにきかせてあげることができなかつたけど、いっしょにうたつた歌をピアノでひけるようになってうれしいです。ピアノがもっと上手になつたら、びょうきやしうがいをもつた人にも音楽を楽しんでもらえたいと思います。また、手伝つてあげる、お世話をするという気持ちではなく、いっしょに何かを楽しむことができたらいいなと思います。

心の輪を広げる体験作文 佳作

しょうがいのある人のスポーツのすごさ

真岡市立真岡東小学校 二年 芳賀<sup>はが</sup> あさひ

わたしは「しょうがい」ということばのいみあまりわかりませんでした。小学校に入学して、同じクラスでもあるじゆぎょうの時間だけがうクラスに行く友だちがいて、その友だちがみんなより少しできないことが多いので、それが「しょうがい」なのかと思っていました。

小学二年生になって、子どもでもふくしのことをわかりやすくべんきょうできるテレビばん組があり、お母さんが

「大へんな人、たすけがひつような人がどういふ気もちなのか知っていた方がいいよ。」

と言って、いっしょに見ています。そのばん組ではさまざまなしょうがいにいいて、しょうがいがある人やまわりの家ぞくやささえていふ人の話を聞くことができます。そのばん組の中で一ばんおぼえていふのが、パラリンピックへちようせんしている人たちの話です。わたしの知らなかった「ブラインドサッカー」や「ボッチャ」といふスポーツの日本だいひょうせん手が、スポーツのみりよくにいつて話をしていました。わたしはブラインドサッカーをやっているところを見て、目が見えないせん手が音のなるボールを止めることができた時にはとてもおどろきました。ブラインドサッカーの日本だ

いひょうせん手は目が見えないというしょうがいがありながら、目が見えるわたしよりも早くうごけて、音だけでボールの場しよを当てることができました。

わたしは、

「しょうがいがあつても、できないことが多くなるわけじゃないんだ。わたしよりもすごい人もいて、しょうがいはかなしいことだけではなくて、たのしいことにかえることもできるんだ。」

今年のならにパリでパラリンピックがかいさいされます。わたしのまだ知らないしょうがいのある人たちがするスポーツがたくさんあると思ひます。わたしがブラインドサッカーを知つたように、もつとおどろくようなスポーツを知りたいです。また、しょうがいがある人の力になつてあげられるようにするためにも、「しょうがい」とは何か、また「ふくし」とは何かをべんきょうしていきたいです。



## 心の輪を広げる体験作文 佳作

### ぼくのおかあさん

鹿沼市立東小学校

五年

野中

胡亜

のなか こあ

ぼくは、かんじがにがてなので、ぜんぶひらがなでかきます。

ぼくのおかあさんは、ぼくが3さいのときに、しんばいていしきぎきゆうきゆうしゃではこばれました。げんいんふめでいしきぎもどりませんでした。きせきがおきていきかえりました。ぼくはそれをきいてよくわかりませんでした。とてもかなしいきもちでした。それはいまでもかなしくなります。

おかあさんは、そのあとにしゅじゅつをしてしようがいしゃになりました。からだのなかにきかいをいれました。おかあさんがきかいをいれたあととてもげんきになりましたが、とてもいたそうだったし、とてもくるしそうでした。ぼくは小さかったのだったことやあそんでほしかったけどできませんでした。

おかあさんのからだにいたきかいをボディちゃんとなまえをつけました。ぼくは、おかあさんとボディちゃんにやさしくしました。みためはしようがいしゃにみえないから、たいへんなだろうなとおもいましたが、おかあさんは、いっしょうけんめいがんばっていました。ぼくは、すごいなとおもいました。

おかあさんは、じぶんがしようがいしゃなのに、ほかのしようがいしゃやこまっているひとにとてもやさしくしています。めのみえ

ないひとをつれていってあげたり、でんしゃでせきをゆずってあげたり、いろんなひとにこえをかけてたすけてあげています。どうしてそんなにたすけてあげるのかきくと、「わたしのときもたくさんのひとにたすけられたから」といっていました。ぼくは、おかあさんといっしょにいておかあさんがいろんなひとをたすけてあげてすこいなとおもいました。ぼくもおかあさんのまねをして、くるまいすのひとにせきをゆずってあげました。ありがとうといってもらえずごくうれしかったです。でもぼくのおかあさんは、もつとたくさんのありがとうをもらっています。ぼくもおかあさんみたいにたくさんありがとうをもらいたいです。

おかあさんはしようがいしゃですが、いつもニコニコしています。せかいじゅうのしようがいしゃの人がいつもニコニコするといいなとおもいました。

ぼくは、おかあさんとボディちゃんがだいすきです。

## 心の輪を広げる体験作文 佳作

### 音楽の力

鹿沼市立東小学校 六年 猪野 いの 龍海 たつみ

ぼくは、小学校最後の年に目標をたてました。それは、多くの人に自分の大好きな楽器を通して笑顔になってもらう音楽ボランティアをすることです。ぼくは、小学四年生のころに母がやっていたオーケストラ部の話を聞き、興味をもち、音楽部に入部しました。ヴァイオリンの音色が好きで向かった音楽部でしたが、ぼくにすすめられた楽器はオーボエという楽器でした。最初はヴァイオリンでないことに気持ちが落ちこみましたがオーボエの音色を聴き、一瞬で心うばわれました。音楽の大会や定期演奏会を通して、ぼくたちの演奏をきき笑顔になる人達がたくさんいることにとてもうれしかったです。ただ、その場に向かいたくても向かえない方やこのイベントを知らない方もたくさんいることを母との会話で知ることができました。その会話の中で、ぼくたちが出向いてその方たちのもとへ行くことで、きいてもらえるのでは？と考えたのが、今回の音楽ボランティアのきっかけです。しかし、どうしたら良いかわからなかったので、母に相談し、福祉施設での音楽ボランティアの提案を受け、まず、春休みに福祉施設を伺い音楽を演奏してきました。初回だったのでもきんちようして聞いてくれた方々の表情まで見ることが出きませんでした。しかし、連絡してくれた母から「とても

良かった」や「感動した」「また来てほしい」との話があったことを聞き、次は自分の目で音楽の力を確認しようと思ひに再度ボランティアに伺いました。ボランティアの前に聞いてくださっている方々のところへプログラムを渡しに行く時、車いすの方や上手くお話しできない方もいることが分かりました。いざ音楽を奏で始めると、皆さん、知っている曲は口ずさんでくれて、身体の不自由さも年れいのかべもこえられることに感動しました。ここでの体験を通して、小学生のぼくでもきっかけさえあれば喜んでもらうことができること、また、その体験は今まで障がいの方に接したことの無い自分のかてになつていけると感じ、小学校最後の夏休みにとても良い機会をいただけました。